

econ. No. 20

エコノ創刊10周年 20号記念

特集 WONDER FACULTY 発見! 経済学部

- 創刊メンバーが語る、エコノ20号発行記念座談会
- 先輩に聞く! 経済学部草創期 ●「北海学園大学経済学部の歴史」

interview OB訪問—働きマン③長沼町長 戸川雅光さん

news 1 2部基礎ゼミ懇親会／1部ゼミ対抗ソフトボール大会

連載企画 研究室の窓から 神山義治教授

news 2 水野谷ゼミナール I・II 「札幌市出前講座」を受講

公開シンポジウム ① 札幌弁護士会会長 高崎暢先生と考える
「労働者の人権の現状と課題」

② 「地域社会とフェアトレード」

news 3 就職情報／保護者懇談会／市民公開講座のお知らせ

祝! エコノ20号



フェアトレード Fairtrade

1960年代に欧州で始まった、コーヒーなどの換金作物や伝統的な技術で生産された途上国の産品を、生産者から直接、適正な価格で購入し、先進国市場で販売する公平貿易/公正取引の仕組みをいう。生産現場での貧困や人権侵害、児童労働などの問題を日常の消費行動から解決しようというこの試みは、世界中に広がりを見せている。(関連記事は11ページ)

エコノ20号発行記念座談会



●No.19/経済学って!? 教室から世界を考える

●No.10/フィールドワークを語る

●No.4/国際社会のなかで生きていく君たちへ

2000年の創刊から10年、他学部在先がけ入試向けの広報誌として発刊された「econ.」は、今号で20号の節目を迎えました。編集委員の先生方にお聞きしました。

●No.1/現役学生が語る「僕たち・私たちの現在、そして、将来

●No.2/人気ドラマの中の日本型企業社会

●No.18/学生時代に国際交流!

●No.13/私の大学4年間

●No.12/ゼミナール活動のススメ

MESSAGE 1

みずみずしい感性をもった教員と職員が意を用い発刊を重ねて20号。経済学部の広報誌として、今後とも有効に機能することを祈念します。

(創刊時、学部長 木村 和範先生)

1. 創刊当時のこと

犬飼 今日はecon. の創刊20号記念ということで、発刊当初に編集を担当されていました森下宏美先生と山田誠治先生にお集まりいただきました。さて、これまで年2回の刊行で20号、つまり10周年になるわけですが、econ. は最初誰が発案したのですか。

森下 よく覚えていませんが、あれは確か木村和範先生が学部長のときで、「社会は『経済エンジニア』をもとめています」という記事をお書きになっています。



森下 宏美 教授

山田 ほくは11号まで担当したからほぼ半分の製作にかかわってきました。最初は面白かったですね。ちょっと遊び感覚があり、思い付きの連続でした。学生が予想外のことを言い出して困ったり、立ち消えになった企画もあった。よく読んだら、これはまずいな、なんていうものもそのまま載せていた。写真も自分たちで撮っていたし、そんな手作りな感じがよかったですね。

犬飼 そもそも、econ. の創刊のきっかけはなんだったのですか。

山田 創刊は、入試向けの学部紹介の広報誌として発刊されました。あのときはまだ大学の学報もなかったのかな? 広報が弱いときで、いろんなところか

らアピールするものがほしいということでした。きちっとした学部の広報誌を作ろうということになったんです。高校向けの入試要覧に同封するという位置づけでした。

森下 新しい学部学科ができるのが2003年ですから、創刊の2000年は、当時始まった推薦入試に向けた情報提供というのもありました。

犬飼 そのときは、他の学部の広報というのはあったのですか。

山田 他の学部はなかったかな?

森下 そうですね。経済学部が最初で、法学部はこの後でした。

山田 その後、各学部が出すようになって、それぞれ学部の性格が出てきましたね。やっぱり経済学部はざっくばらんな感じが持ち味だから……。

当時の制作会社の人がポップな漫画チックな仕上げにしてくれて興味をもってもらえる紙面にしていただきました。

犬飼 他の大学の広報誌はどうでしたか。

山田 某国立大学がほんとにシンプルな広報を出していたのを見て、これならもっと工夫して個性的なものを作ったね。もっと面白く、読みやすいものが作れるだろうと。その見通しは甘かったですが…。

2. 「卒業前にひとこと」

犬飼 一番好評だった企画はなんですか。

山田 それは、絶対、3号からはじめた



「卒業前にひとこと」。

森下 あれは面白かったですね。

山田 卒業前の学生に「一言集」を書いてもらう企画なんだけど、記事の集め方にもよって出来栄は違いましたが、ネガティブなことをいいたすやつもいて、「四年間だらだらと過ごしました」なんていうのを載せたらまずいだろうなんて思いましたよ。でも、そのまますの経済学部の状況を自然体で「さらす」のも一つかなと思って載せたんだよね。

犬飼 危ない発言とかあったのですか。

森下 ありました。

山田 特定の教員に対する恨みとか…

犬飼 あー、それは面白いですけど今回も出せませんね(笑)。でも、個人名は別として、学生から嫌われる先生に共通するのはどんなところですか。

山田 やっぱり、昔ながらの、上から目線で学生を馬鹿にしたような向き合い方をする先生かな。ほくはそれぞれの教員の個性や感情が出てくるのがあっていいと思うけど、そういうのがそのまま対立感情みたいなままだと、学生からは「この野郎」って感じになっちゃうよね。

MESSAGE 2

econ. は教職員や学生のさまざまな活動を伝え、また、校友の活躍ぶりを紹介し、保護者との連携を強めています。伝統の経済学部ここにあり。

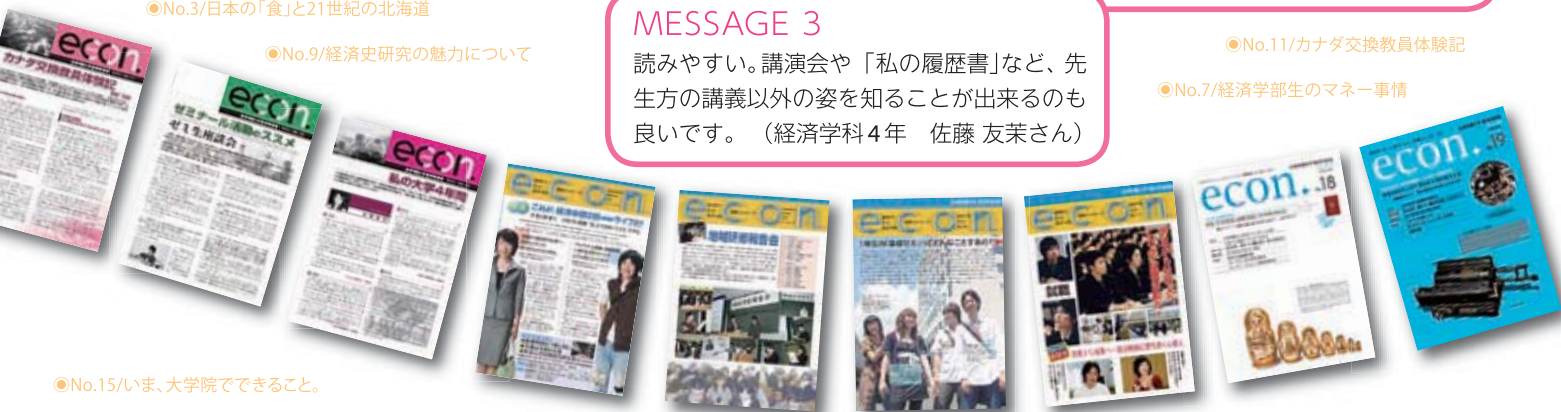
(創刊時、学部事務長 吉田 敦さん)

MESSAGE 3

読みやすい。講演会や「私の履歴書」など、先生方の講義以外の姿を知ることが出来るのも良いです。(経済学科4年 佐藤 友菜さん)

MESSAGE 4

「働きマン」はOBの方々、平坦でない生き方が出ていて興味が湧きますね。いつも読んでいますよ。(経済学科3年 三津橋 勇介君)



犬飼 なんとなく懐かしいですね。昔はどここの大学にもそんな超然とした感じの先生がいて、学部の頃なんか、かえって尊敬したものです。もちろん、

反発する学生もいて、卒業を機会に罵詈雑言ですか。でも、それはさすがにのせられなかったのですね。そういう学生は多かったのですか。

山田 そんなに多くはなかった。教員への不満よりは、自分の辛さや個人的な反省を書く学生のほうが多かったと思います。そのへんがうちの学生の、良くも悪くも、まじめなところかもしれない。

3. 地域経済学科ができてから

犬飼 地域経済学科について何かありませんか。econ.8号「地域研究の魅力」の冒頭の対談で、高原一隆先生が、「地域経済学科を発足させた目的は、道内の学生が9割、札幌出身者が6割以上というこの大学の特長を生かして、北海道における21世紀にあたっての新しい地域づくり、街づくり、村おこしの担い手と、その新しい芽を育てていくこと」とおっしゃっています。7年経って感想はありますか。当初の意図は実現されていますか。

山田 確かに、それは検証していかな

くてはいけません。他の学部の先生が使った言葉だけ、「北海学園というのは、北海道の中核組織に人材を送り出している」。実際、就職先は道内中堅企業が多く、そして各地の地方の公務員。うちの学生で印象的なのは、ローカルに対する抵抗感がないことですね。本当に成績優秀な学生が、生まれ故郷に就職して地域の担い手になってやろうとしている。これは偉いと思うね。

森下 うん、僕のところもそうです。みんな北海道の各地の中心で活躍している。ほくに年賀状くれる卒業生だけでもいろんなところにいます。都会に対するこだわりみたいなのが少ない人材が意外に多い。

山田 本州の学生や一部教員にありがちな東京一極集中、中心指向向きたいなのとは違う感覚を、うちの学生はもっている。心強いというか、あるいは、

そういう人材にきちんと力をつけて送り出す、というのがわれわれの務めかなっていうのもあります。

犬飼 最近思うのですが、北海学園大学は関係者が思っているよりもはるかに重要な役割を果たしていますよね。うちの大学の卒業生がいなければ、いまの北海道は成り立っていない。でも、そんな存在感や責任感、社会における実力を、学生や関係者は十分に自覚し

ていないですね。実感するのは、卒業・就職してかなりたってからのようです。

山田 逆にいえば、いまの北海道の不況は、うちの大学のせいなのかもしれない(笑)。もちろん、そのへんの関係もあって、地域経済学科の推薦入試は、受験慣れしてなくても地方のまじめな学生を入れようということをやってきました。地域のリーダーを育てるとい

犬飼 そうですね、以前指定校推薦の学校訪問というのがあって、教員が地方の高校をまわっていました。そのとき印象的だったのは、田舎に行くほど担当教員の視線が熱い。とある高校では、その晩予約した宿まで車で2時間ぐらいかかるのですが、進路指導担当の先生の熱弁が午後6時を過ぎてもつづく。あれは大変でした。

山田 ちょっとタクシーに乗っても「学園」のネタをきっかけに盛り上がるし、場合によっては、「ちゃんと教育しろ」と、手厳しく指摘もされる。そのへんの存在感を、学生が自覚していないというか、社会と大学の意識の間にずれがある。

森下 いま学士課程教育が問題になっています。そこで重要視されるようになってきているのは、学生が卒業してから、大学で学んだものが生きていくうえでの知恵になっているのかという点、つまり卒業生の評価が大事だと最近いわれているんですね。

山田 そうですね、だから卒業生が何をしているのかも大学として把握することは、一つの課題だと思います。-終-



犬飼 裕一 教授



山田 誠治 教授

先輩に聞く! 経済学部草創期 *since 1952*



●座談会参加者●
左から、岡元さん(2年生)、
宮崎さん(本学OB、3期生)、
山根君(3年生)、三橋君(1年生)、
木村君(新聞会会長、3年生)



3期生●宮崎 文彦さん



地域経済学科2年●岡元 綾子さん

本学の沿革は1952年(昭和27年)「北海学園大学経済学部」が北海道初の4年制私立大学として認可され、259名の学生が入学したところからはじまります。エコノ20号発行の節目の記念に、本学草創の頃をその3期生である同窓生の宮崎さんに教えていただき、北海学園大学の歴史を学生の視点からひもとくことになりました。宮崎さんは本学学報に2001年から6年間「北海学園大学草創記」というコラムを執筆され、また同窓会報の編集委員もなさっており、大学の歴史に詳しい同窓生のおひとり。新聞会の創部OBでもあることから、後輩で日頃本学の学生新聞制作を通じてキャンパスのさまざまな出来事に精通している、現I部新聞会の経済学部生山根君、岡元さん、三橋君、そして現会長の木村君(法学部)に集まっていただき座談会をおこないました。

宮崎●3期生と紹介されましたが、実は北海道に初めてできた私立大学ということで上の学年はいないし、1期生だと思い意気揚々として入学式にのぞんだら、2・3年生がいた。前身の北海短期大学生がそのまま大学に編入していたんです。ですから最初なのに3期生ということになってしまいました。1期生が70人くら

「1期生だと思い意気揚々として入学式に望んだら、2・3年生がいた」

い、2期生が100人くらい、私たち3期生が250人くらいでした。そのうち女子学生は2名(後に編入で2名増え計4名になる)でしたが大切にされていました。北海道で初めてできた私立大学ということで、高校新卒から既に社会に出て働いていた人たちまで、向学心はあるけれど本州の大学まで行ける経済事情にないような人たち、それまで大学進学をあきらめて就職していた人たちまで、10代から20代、30代とさまざまな年齢層がいました。炭坑で働いていたという人もいましたよ。人数が少ないので、2・3年生も含め全員が皆知り合いで、みんな友達のような雰囲気がありました。山根●僕たちは出身高校などで固まったりします。ゼミなどで新しい友達はできますが、仲間は作りづらいです。

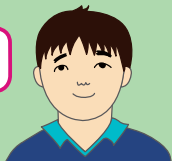
岡元●(当時の卒業アルバムを見て)校舎はこの建物(現在の1号館)だけですか。

宮崎●受験は大きな講堂で行いましたが、通い始めたら校舎がないんです。驚きました。校舎のない大学な

北海学園大学 経済学部の歴史

北海学園大学に入学した板橋君。歴史が大好きな彼は、入学した大学の歴史を知ろうとゼミの犬狩先生に聞きに行きました。

歴史好きの板橋君



学園の歴史のことなら、犬狩教授

一九四九年
札幌北海学院設立
各種学校

一九五〇年
経済学科一部、同一部開設
北海短期大学設立

板橋君(以下、板橋)：学園が昔、短期大学だったというのは本当ですか？

犬狩先生(以下、犬狩)：そうですね、戦後になって、それまでであった北海中学を拡充する方針が決まって、まず各種学校北海学院が設立されたんだ。その年に政府によって短大設置が認められたので、四年制大学移行までの暫定措置として、短大を設立したんだよ。

板橋：初めは何学部があったんですか？

犬狩：当初は学部はなく、経済学科だけだったんだ。大学としては経済学科が一番歴史がある、ということになるね。



開学当時の短大/大学校舎(旧札幌商業高校2階/現在の大学3号棟)

コラム2 ●三森先生と学歌

昭和33年に制定され歌い継がれている「学歌」の作詞者三森先生について、次のような宮崎さんの一文がある。

「開学当時学生の人気があった三森定男先生は、本学創立時に立命館大学から赴任してきた。授業でも課外活動でも熱血ほとばしる指導ぶりは、ときには激しいものがあった。専門は人類学で、その講義する声は大音響ともいえるほどで、大教室の後方の席まで明瞭に聞こえた。」
 (「学報・北海学園大学草創記」より)



学歌の作詞者である、
三森定男教授

北海学園大学学歌 作詞 三森定男 作曲 大築邦雄

- あれくるうあらしに
さかまく大海原に
若人よ恐れず船を出せ
ほこりと友情もて
かたく結びつこうよ
大いなる世界をつくるために
永劫の心のすみか
われらが母校 北海 北海
北海学園大学
- 雪に起り風に消え
はて遠くつらなる土に
若人よためらわず鋸をおろせ
知性と意欲をもて
つよく生き抜こうよ
実り多い世界をつくるために
永劫の心のすみか
われらが母校 北海 北海
北海学園大学
- 進み行く道の行手に
たちはばむ障害(さわり)あろうと
若人よおじけず勇気をだせ
理想と情熱もて
雄々しく立ち向かおうよ
新しい世界をつくるために
永劫の心のすみか
われらが母校 北海 北海
北海学園大学

「通いはじめたら校舎がないんです。 …学生自ら街頭に出て校舎建設の寄付金集めをしました」

んてあるのかな、よく認可されたなど。札幌商業高校(現北海学園札幌高校)の校舎の2階に間借りして授業が行われていました。高校生から「お2階さん」とからかわれていましたよ。校舎がない大学を卒業するのはいやだと、「校舎が欲しい!」という思いから学生自ら街頭に出て札幌市民に呼びかけ、校舎建設の寄付金集めをしました。「軽音楽の夕べ」というような資金集めのコンサートを企画したり(*コラム1)、大学側も「学債」を発行して資金集めをし、やっと3年生の終わりに今の1号館ができました。4年生の1年間勉強できました。やっと念願がかない嬉しかったですよ。

山根 ●校舎の建設運動を学生自らするなんてすごいですね。授業はどのようなものだったのですか。いまは沢山の講義があるのですが、どうだったのですか。
 宮崎 ●あまりなかったなあ。農業経済の先生が多く、開発政策とか講義は少なかったように思います。経済統計、経営学とか。あと商品学、今はありますか。商品学で、「納豆の作り方」とかで(笑)、「これが経済学だ」という講義科目が少なかった。当時の大学案内を持っていますので調べてみましょう。(後日、昭和30年度の大学案内を見せていただくと専門科目は相当数開講されていました)今は大学案内を見ると、講義も優秀な先生たちも沢山いらっしゃるって、恵まれていますよ。沢山のの中から選択するのが大変でしょう。

山根 ●はいそうですね。4年間でも全部は履修しきれません。

宮崎 ●私たちの頃は先生の数も少なく、名物先生として開発政策論の池田善長先生、うちの大学の学歌を作られた文化人類学の三森定男先生(*コラム2)などいましたが、ゼミの選択も特定の先生に殺到して私の所属ゼミは2名のみでした。新聞会の学生新聞には



地域経済学科3年 ●山根 永睦君

コラム1 ●念願の校舎建設とパイオニア精神

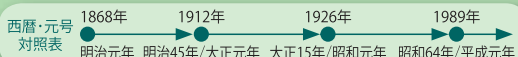
3期生にとっては、自前の校舎で勉強することが念願だったが、その建設資金集めは相当な苦労があった。「六大学軽音楽リーグ戦」という東京のラジオ番組を真似て、東京から立教大学を招き、北海道大学など道内大学にも呼びかけて「軽音楽の夕べ」という資金集めのコンサートを開くなど、並々ならぬ熱意があった。その根底には上原徹三郎初代学長が入学式式辞で本学学生のモットーとして説かれた「パイオニア精神」があり、3期生にとっては忘れられない大事な言葉である。

新築された校舎とポプラの木の下に集う3期生(1955年)



一九五二年 北海学園大学設立

板橋: 四年制に移行したのはその二年後ですね。
 犬狩: 当時の北海道には国公立大学しかなかったんだ。それに大学で学んだ学生の多くは道外に出ていってしまった。そこで、大学進学道を広げ、北海道で活躍をする人材を育てるため、四年制私立大学への移行を政府に申請したんだ。
 板橋: それが認められて、四年制大学になったんですね。
 犬狩: そうだね。北海道の私立大学第一号として、それまでの短大生と新入生 259 人でスタートしたんだ。当初は、経済学部一部経済学科のみで始まり、翌 1953 年に二部の設置が認可されたんだ。



英語会話研究会(E.S.S.)が中心となり、「国際的諸問題に対する学生の視野」をテーマに、本学で開催された開学後初の大きなイベントとなった学生国際会議の記念撮影(1955年7月、1号館前)

コラム3 ●本学野球部「不滅」の歴史

「ドラマは道予選から始まった。決勝の相手は北大。この試合に勝った方が本道大学初、神宮行きの切符を手にする。(中略)わが校は、以来(1955年から)10年間神宮の常連となり“不滅の10連勝”として本道大学野球史に残っている。」(宮崎さん筆『学報・北海学園大学草創記』より)。また、本学野球部の歴史には本道大学初のチアリーダーの歴史も重なる。1981年、宮崎さんはこの試合の観戦もしている。当時の本学チアガール4名の出現に湧いた北海

道6大学野球での対札大戦は逆転勝利をおさめ、通算14度目の神宮行きを決めた。



初代チアガールの4人(1981年、対札大戦に逆転勝ちの後、麻生球場で宮崎さん撮影)

「できたばかりの大学だったので、足りないところは自分たちで作って行く」

で行くなど、沢山の逸話(*コラム3)があります。スキー部も強かったかな。最近はどうですか。

山根●6大学野球以外は勝ち試合を見越した取材が多いです。新聞紙面が暗くならないようにしています。

宮崎●当時は二つの部活を兼部するのは普通でした。応援団員がサッカー部員だったり、卓球部員だったり、勉強している暇がなかった。卒業が心配でした。卒業延期は不名誉なことだったので大変でした。

木村●現在は海外留学のために休学してまた復学したり、大学生活の一部として留年する人がいます。それを個性としてとらえていることも多いと思います。

三橋●自分は大学選びもそれほどこだわりはなかったのですが、今と比べて学生の雰囲気とか校風というか、変わったと思うところはありますか。

宮崎●できたばかりの大学だったので、足りないところは自分たちで作って行く、先生方と一緒に。大学で学ばなければならないことはあるけれど、学ぶ環境にしろ、大学をどのようにして行くかということも、自分たちで考えてやっていました。大学の基礎づくりは自分たちで作って行こうということに取り組んでいました。今の学生さんたちとはきっと違うでしょう。

三橋●そうですね。よく校風とか考えずに、学力レベルとかそういったことで何となく決めました。



経済学科1年 ●三橋 誠君



新聞会会長 ●木村 直人君
法学部3年

卒論テーマなども掲載しましたが「こんなのでいいのか」というものもありましたよ。講義の出席はすべて出席カードが配られ出席は100%に近く、いつも講義は騒々しいくらい教室は埋まっていた。

岡元●サークル活動や部活の練習は、どこでしていたのですか。

宮崎●北海高校の古い校舎が空いていて、現在一部は「北海道開拓の村」に移築されましたが、それを拠点に使えるようになり私たち新聞会も部室が割り当てられ、「自分たちの縄張りだな」という感じで、これも嬉しかったですね。よく飲み会もやりましたが、新聞作っているよりも飲み会が多かったかな。ただ、三森先生が顧問だったので、先生方の文章もあり、外部からの寄稿文もありレベルは高かったように思います。北大、樽商大など当時の他大学学生新聞は言いたい放題の学生本位で、それと比べると過激な内容ではありませんでした。大学ができたばかりなので、学内で騒いで大学が市民から批判などされ潰れたら困る。もともともなくなり行く場所が無くなる。大学を盛り立てるにはどうしたら良かに視点がありました。大学と協調した新聞づくりでした。私は創刊号から16号まで制作に関わりました。

岡元●部活動は何が一番注目されていたのですか。

宮崎●硬式野球とバレーボール。バレー部は抜群に強かった。北海道では社会人に負けなぐらい強かった。今でもバレー部の指導をされている1期生のOBが本州の大学で活躍していて、北海道に戻り本学で活動して強くなりました。道内各校から優秀な学生が集まっていた。野球は全道で「不滅の10連勝」と言っているのですが、全国大会の神宮球場でも何回か準決勝ま



1953年の大学案内冒頭には上原徹三学長の巻頭言とともに、アメリカの詩人ウォルト・ホイットマンの詩集「草の葉」から「PIONEERS! O PIONEERS!」が掲載されている。

一九六六年

経営学科増設

板橋：昔は経済と経営が一つだったとも聞いたんですけど。

犬狩：今の経営学部は、経済学部経営学科としてスタートしたんだ。経営学科が設立されたのは、1966年。その頃から、企業などで経営学を学んだ人材が必要とされ始めていたんだけど、当時の北海道には小樽商科大学にしか経営学科がなかった。そこで、ちょうど学園で進められていた総合大学化の一環として経営学科の設置が進められたんだよ。その後、2003年に学部として独立したんだ。

二〇〇三年

一部地域経済学科増設

板橋：地域経済学科が出来たのも2003年ですね。

犬狩：学園の学生は道内出身者が多く、しかもその半数以上が道内で就職をする。だから、北海道及び各地域の発展を担っていく人材を育てる必要がある。そのため、広い視野で「地域」について学び、考えることの出来る学科として、新たに、地域経済学科が設立されたんだよ。



2008年度の地域研修報告書

コラム4 ●大学ゆかりの建物

本学のキャンパスには、大学最初の校舎1号館から2003年竣工の7号館までさまざまな建物がありますが、大学揺籃期の建物が、最初の使命を終えた後も役割を換えて現在も存在します。



1911年開館、1916年2階増築、北海学園図書館北駕文庫(現1号棟)



1959年当時の北海学園全景(手前右に1号館、その西側に厚生施設・サークル棟として旧北海中学校校舎がある)



1953年完成、最初の北海学園図書館(現2号棟)



1968年完成の旧図書館(現教育会館・コスモス)



開学当時の大学校舎(1938年完成旧札幌商業高校校舎・現3号棟)

宮崎●やっぱりそうですね。皆さんのちょっと上の先輩たちに聞いてもそうですよ。「そんな歴史があったんですか。私たちは何も知らないでここにきました」と。うちの大学だけではなく、ここにこんなレベルの大学があるからとね。よくいわれている建学の「パイオニア精神」、パイオニアでなければならない、作り上げて行かなければならない。「俺たちがこの大学を作ったんだ、汗水たらして作ったんだ」、という気持ちがありましたね。(*コラム4)

山根●現在は授業の幅も増えて、単位を取ることだけではなく、選択する権利も増えたのですが、興味を持った授業に取り組んで行くこと、将来に繋がることに積極的に取り組んで充実した学園生活にしていくことが大事ですね。校舎のない時代からここまで大きくなったのだから僕たちは恵まれています。

岡元●今の学生は、大学があること、先生たちから教わること、全部当たり前の中で勉強していますが、宮崎さんたちの頃、校舎がないような時代に自分から作って行くこと、そのように動いて行くことに消極的な部分があります。自分から動いて行かなければまわりも動かないから、動いて行くことが大事かなと思います。

三橋●さっきもおっしゃっていましたが、何と

なく大学にきて、何となく授業受けて、何となく卒業という人がちょっと多い。校舎を作ったりしようとする精神をもってやっていければいいと思います。校風の変化を感じました。

木村●大学に入り、高校にいたときは想像もしなかったような生活があります。学内外のひとと1回限りの出会いだったとしても、一つ一つの積み重ねが自分の人生に関わってきます。それを自分の中に少しでも大事にして行きたい。直接的に形にならなくても、自分の中に残って行くように頑張っていきたいです。

宮崎●これだけもう施設も完備され、恵まれた環境にいるのだから、私たちががむしゃらに動いたというようなことはもう過去のことです。自分の心の中でいかに積極的に取り組んで行くか。いわれたからやる、いわれなければやらないという待ちの姿勢ではなく、自分ひとりひとりをどう高めて行くか。個々のあり方が大切。何となく4年間いた、勉強も何となく全部やったと、だから卒業するというのでは個性がありません。それ以外に何か自分を充実させる部活もあるし。今日の皆さんで言うなら「新聞」やゼミ活動でしょうか。就職の問題も大切だが、何か4年間でつかんで卒業して欲しいと思います。



1909年(明治42年)頃の北海中学校校庭の整備(現在の北海高校正門付近、旧北海中学校校舎は現在北海道開拓の村に移築保存されている)



最後に、大先輩の宮崎さんを囲んで

二〇〇三年 基礎ゼミナール開講

板橋：一年生向けのゼミ(基礎ゼミナール)が始まったのもこの年なんですよ。

犬狩：それまでゼミは上級生を対象に行われていたんだけどね。高校と大学は勉強の内容もやり方も全く違う。だから、一年生のうちにそれらを学んでもらおうと始めたんだ。

板橋：勉強より、ソフトボール大会の練習やゼミの仲間と遊ぶことに熱中してしまうんですけど。

犬狩：それも目的の一つだけだね。勉強はもちろん、大学生活全般に早く慣れてもらって楽しい大学生活を送っても

らうことが重要なんだ。まあ、遊びだけじゃ困るけど。

板橋：そういう意味ではすごく助かっています。

犬狩：一部で成功したこともあって、今は二部でも基礎ゼミが開講されているんだ。板橋君も早く学校に慣れて、有意義な大学生活を送ってね。

板橋：はい。今日はありがとうございました。

自分の大学の歴史を知ることは大事だね。



一部神谷基礎ゼミの様子(二枚とも)





ガンバリを支えてくれた、仲間との出会い

戸川 雅光さん

とがわ まさみつ



▲入学当時の戸川さんの学生証

札幌にもほど近い空知南部。人気のファームレストランが揃い、美しい農村景観でも知られるのが長沼町だ。都市と農村との交流に新たな針路を定めるこのまちを率いるのが、われらが先輩戸川雅光町長である。

◀グリーンツーリズムの取り組みが高く評価された「平成20年度日本農業賞特別部門優秀賞」のカップを抱いて

農業経営者だった経済学部生

2008年7月、20年ぶりとなる町長選を経て長沼町長に就任した戸川雅光さんは、北海学園大学経済学部1971年の卒業生である。長沼の農家に生まれ育った戸川さんだが、大学2年の春に父を病で亡くしてしまう。その後は一家を背負い、農業に取り組みながらの大学生活。華やかなサークル活動やアルバイトなどとは縁の薄い大学生活をおくることになった。

「うちは水田と畑、そして養豚をしていました。田づくりと田植え、畑の作付けで忙しい春は、どうしてもひと月くらいは大学に行けません。でもそれ以外は、早朝に農作業をしてから、いまはもうない夕張鉄道で(途中野幌で国鉄に乗換え)通っていました。夏までは田んぼの水の状態が重要ですから毎朝4時起きです。帰宅してから仕事は山積み。とくに豚の世話是一日も空けられません。とにかく休みなしの日々でしたね」

現在の大学生にはとても考えられないハードな生活に思えるが、当時をふりかえって戸川さんは、とくべつ歯を食いしばってがんばった、という気持ちはないという。

「なにせ働かなければ家族の暮らしが立ち行かないのですから、そんな毎日が当たり前だと思っていました。中学生のころから一家の働き手として土にふれていましたし」

春に欠席が多くても無事4年間で卒業できたのは、友人たちのおかげ。受けられなかった講義は、ノートを借りて独学した。そのうえ講義はひと倍貪欲に取り、4年間で160単位以上を取得した。とはいっても、講義の空き時間を利用して麻雀をしたり、学園祭での模擬店など、ひととおり学生生活を楽しむこともできたという。

「当時は各地の大学で学生運動が盛んでし



在学時代、学友と徒歩(！)で行った定山溪で

た。北海学園でも主に学費値上げをめぐる学生の反対行動があり、その中心にあった自治会に深く関わっていた仲間もいました。社会が騒然としていた感もあり、そのぶん余計に、友だちとの付き合いも濃密であったと思います。当時の仲間とは卒業後もずっと交友を続けています」

長沼の基盤、農業を未来へ

ゼミは阿部吉夫教授の「農業経済」。なにしろ戸川さんは自分で実際に農業経営をしていたので、教科書では学ばきれない実践経験が豊富だった。

「だから研究発表を担当したとき、具体的な事例をもとにしているのが分かりやすく興味深い、などと先生から褒められたことを覚えています(笑)」

卒業後、仲間は都市の民間企業に就職する者が多かったが、農業を担う戸川さんは長沼に帰らなければならない。しかし農業専業で暮らすには経営の規模が不十分だったので、役場の就職試験を受けることにして、採用となった。今度は農業を続けながらの役場勤めだ。早朝から夜更けまでの忙しさは変わらない。

「最初の配属先は産業課で、獣医さんや農業改良普及員といっしょに農家をまわるような仕事でした。行く先々で、役場の新人のくせに豚の扱いがうまいとか、農業経営の勘所をよく知っていると、また褒められました(笑)。作物について詳しいだけでなく、やはり自分一家を営んでいたことが大きかったです」

実家の農業はその後4年ほどで土地を売っ

て、廃業。役場勤めに専念することとなった。産業課のあとは総務や財政、議会、教育委員会など農業現場から離れて行政マンとしてのキャリアを積んだが、戸川さんの胸から大地への想いが消えることはなかった。

「どんなに時代が変わっても、長沼の原点にして中心は農業ですから」

札幌都心から車で約1時間。北海道の玄関新千歳空港にもほど近い長沼町は近年、都市との交流を積極的に進め、農家民宿(グリーンツーリズム)などを軸にした先進的な取り組みで全道の注目を集めている。農業を基盤にこうした新たなまちづくりを本格始動させたのは、助役(副町長)時代の戸川さんらの取り組みだった。

「2004(平成16)年から行動を開始し、国から『長沼町グリーンツーリズム特区』の認定を受けました。いまでは町内150軒以上の農家が、本州の中学・高校の修学旅行生を年間4000人以上受け入れ、単なる観光とはちがう心の通い合う体験を重ねています。これは子どもたちにとって、そしてまちにとっても、すばらしい財産となっています」

学生時代から今日まで、戸川さんはつねに現場での挑戦や経験を大切にしてきた。

「若い人には特に、夢や目標を持ったなら、頭でっかちの知識や先入観にとらわれず、とにかくまず行動してみよう!と訴えたいですね」



約四十年前の学生時代の記憶も鮮明に語っていた(長沼町役場町長執務室にて)

- profile.....
- 1949年 長沼町生まれ
 - 1967年 長沼高校卒、本学経済学部経済学科入学
 - 1971年 本学卒、長沼町役場に入場
 - 2000年 それまで議会事務局長、商工観光課長などを経て教育長に就任
 - 2004年 助役(のち副町長)
 - 2008年 長沼町長に初当選

2部 基礎ゼミ懇親会

2009年5月21日、2部基礎ゼミの懇親会がレストラン・コスモスで開かれました。9つのゼミを合わせ約150名が参加し、おいしいお料理とともに親交を深めました。中でも、好評だったのが、学部長杯をかけたゼミ対抗ゲーム大会。クロスワードパズルとタオルゲームの2ゲームで、各ゼミがチームワークの良さを競い合いました。会場にいた全員が「シラフ」だったのですが、そうとは思えない異様な盛り上がりでした。栄冠を手にしたのは、奥田ゼミ(1位)と瀬川ゼミ(2位)。学部長より生協のお食事券が送られました。



1部 ゼミ対抗ソフトボール大会



6月15日から6月18日にかけて、毎年恒例のゼミナール(1部)対抗ソフトボール大会が、月寒公園坂下球場で開催されました。一部、雨で延期になる試合もありましたが、概ねさわやかな春の日差しのおかげで、熱戦が繰り広げられました。今年は、60チームが参加し、トーナメントを争いました。優勝したのは、「市川ゼミI・II」。決勝戦では「伊藤ゼミI」を4対0と完封し、栄冠を勝ち取りました。チームによって、悲喜交々、いろいろとあるでしょうが、勝敗に関係なく、「打ち上げ」は大いに盛り上がったものと思います。

最後に、大会の準備、運営、後片付けをしてくれた、主催者の経済学部ゼミナール協議会の皆さん、ありがとうございました。

研究室の窓から

地球経済の大波乱と私たちの生活

神山 義治 経済学部経済学科教授
かみやま よしはる



ソポクレス『アンティゴネー』▶
(呉茂一訳、岩波文庫)

◀シェイクスピア『アテネのタイモン』
(小田島雄志訳、白水社)

バブル崩壊の古典的原理と現代的意味を かんがえる

波は東アジアの弓なりの列島を襲い、企業を倒し、労働者を望まぬ遊休状態へと押し流しています。ILOが2億を優に超える失業を予想し、IMFも世界のGDPの戦後初のマイナスを予想するほどの現在の世界同時不況ですが、その速度と規模においてまさに恐慌と名づけるにふさわしい展開を示しています。合衆国のバブル破綻を震源とした世界的な波乱に20世紀の「大恐慌」の再現を、新世紀的な衣をまとっての再現を多くの人が見いだしたのも当然のことです。

尊厳を有する1人1人の人間とかげらの力が集結したさまざまな姿とを座標軸にして、人間開発とグローバリゼーション、労働と企業などをテーマとして、ゼミでは考察を深めることを目指しているのですが、今年はややタイムリーに、産業循環と信用を素材につけかわえて、「恐慌」という文字のタイトルの入った本を読んだりしています。

国境を越えるマネーからみえるものはなにか

マネーの膨張が破裂して収縮し、産業活動を停滞させています。バブルの宴が終わってみれば、醒めた眼差しのまえに明かされているのは、貨幣が、生産物の生産というその根源から逃れようとしてモニター上の数値の世界を自己目的にして増殖しようとしたものの、限界であったということではないでしょうか。貨幣がもともと生産のための道具だったというあたりまえの事実ではないでしょうか。あるいは、貨幣が生産を道具にして増殖するというもとの逆立ちに貨幣は縛られているということではないでしょうか。生産過程を捨てて《貨幣-増大した貨幣》という短縮形において仮想的に膨張することには根源的な制約があります。暴力的なマネー圧縮のプロセスこそは、この根源的な制約が課す、社会の一種の回復過程にほかならないともいえます。

地球規模で移動し増殖しようとするマネーもそのもとの姿においては、ばらばらな生産組織に社会のお金を供給する産業の拡大装置なのであって、眠っている貨幣のかけらを集め

ては目覚めさせ、工場や原料や労働力といった労働過程の要素に転換するしくみです。産業資本の蓄積をその個々ばらばらな孤立しあうありかたから解放しようとする社会的資本といってもいいでしょう。貨幣の連鎖とはじつは、私たち自身の生産の社会的なつながり以外のなものでもありません。だからこそ現在「金融は誰のものか」というようにあらためてグローバル経済の公共性が問われるわけです。

アリストテレスからケインズまでの人類の思索

以上は『資本論』を読んでいる者としての1つの感想にすぎないのですが、お金の魔力こそは現代社会の発展と課題の根底にあるものの。『資本論』世界の物語の構造は、お金の魔力を中心に回っているものとして読むこともできます。

①「金貨か?色にきらきら輝く貴重な金貨だな?/……これだけの金があれば、黒を白に、醜を美に、邪を正に、卑賤を高貴に、/老いを若きに、臆病を勇氣に変えることもできよう」
②「まったく、人の世の習いにも、金銭ほど人に禍いをなす代物はない、此奴(こいつ)のために町は亡ぼされ、民は家から追い立てられる。この代物が人間のまともな心を迷いに導き…」

①はシェイクスピアの『アテネのタイモン』(小田島雄志訳、白水社、110-111頁)、②はギリシャ悲劇『アンティゴネー』(ソポクレス作、呉茂一訳、岩波文庫、25-26頁)から。『資本論』本文からではなく、貨幣の本質と形態をつかむ章の註で引用されている部分をあげてみました。黄金の物体が動きだすと人間世界が逆さまになり、街を破壊してしまう不可解さ。古来にあらわれた貨幣の謎の力は今まさにその頂点に到達しているかにみえます。道具であったものが人間・社会・自然を道具にしてしまう、という逆立ちの威力は、『貨幣-増大した貨幣』の際限ないうねりが人間・社会・自然を飲み込もうとする現代社会において完成しています。

この限りのない運動について、『資本論』は資本の貨幣からの始まりをあつかう章の註で、アリストテレスの「家政術」に対する「貨幣術」をとりあげています。有用な財貨を得るための「家政術」は特定の欲求をみたすという適切な

終りのあるものですが、貨幣から始まり貨幣に終る「貨幣術」は、目的が目的である反復なので、終りのないものです。無限にすすんでいかねばならないこの無内容な形式は、特定の生産と欲求、自然と人間の適切な交流を配慮しない、「持続可能性」のないもの、根源的に不可能なものです。この運動は抽象的ゆえ、富を得る力を蓄積し、地球を開発し、産業革命を手段にし、封建的絆を引き裂くダイナミズムを現代社会にあたえたとともに、自然を破壊しようがなんだろうが突きすすむ形式なのでから根源的に限界があるのです。

ここで想起すべきは、「人生の享受と現実のための手段としての貨幣愛」と「財産としての貨幣愛」というケインズの区別でしょう(宮崎義一訳『ケインズ全集』第9巻、東洋経済新報社、397頁)。ケインズは「財産としての貨幣愛」は「資本蓄積を促進する」から「犠牲を払っても維持されている」が将来「富の蓄積がもはや高い重要性をもたないように」と「半ば病理的な性癖の一つとして、見られるようになるだろう」とのべています。資本蓄積の使命が終れば貨幣愛の役割も消滅するという理論です。

学ぶことと現実

微塵も社会関係を含まない金属Auに魔力が宿るのを幻想したり、富の移転命令書のねだんの膨張に浮かれたり、人間を原材料と等しく数字にしたり、現代人の病は深まるようにもみえます。しかし、私たちはまた、貨幣の力のもとでおこなってきた自己犠牲がなにをつくりだしてきたのかを、不透明なヴェールをとりさって、おもいだせる地点にたどりついていません。今回の世界同時不況で国際社会の経験がすすんだことに示されるように、経済は今や、私たち自身がつくりだし、未来に向けてよくしていくべき豊かさの源であり私たちが積極的にいかかわっていくべき協同の基盤であることをあきらかにしています。学び、社会に関心をもち、みずからの生活を社会のなかに位置づけ、参加意識を高め、地域経済のリアルな現状を認識し、改善の道をかんがえていく大学でのトレーニングも、豊かさの源をつくりだすうえで不可欠な、現実社会の重要な一部分なのです。

水野谷ゼミナールI・II合同で 「札幌市出前講座」を受講

水野谷ゼミナールI・II合同は6月2日、今年度のゼミテーマ「食糧問題・企業による食糧廃棄の現状と規制」の学習取り組みとして、札幌市が市民への情報提供と対話の一環として行っている「出前講座」を受講しました。

水野谷ゼミでは毎年経済社会分野においてテーマを設定、そのテーマに沿った調査を地域研修で訪問し行っています。その事前学習として、今回札幌市環境局、札幌市教育委員会による出前講座が実現しました。当日は本学のゼミ室にまで出向いていただいた札幌市職員により、①ゴミ減量推進課のゴミ減量とリサイクル、②栄養担当指導のさっぽろ給食フードリサイクル、③事業廃棄物課の事業系廃棄物の処理の三講義がおこなわれました。

水野谷ゼミは毎年「日本経済ゼミナール大会」に参加し、研究発表を行っています。今年度はこれに加えて食糧問題の現状に対して、解決策としての条例考案までを目標にしています。食糧生産地北海道に位置する札幌が、日本で初めて企業に向けて本格的な条例を作ることを意味と、札幌発信での全国的な食糧廃棄規制の普及を期待して提案していくという水野谷ゼミの研究取り組みが注目されることです。



今回の札幌市出前講座講師。左から、栄養指導、事業廃棄物課、ごみ減量推進課の担当者。

公開シンポジウム

札幌弁護士会会長高崎暢先生と考える

「労働者の人権の現状と課題—過労死・過労自殺の現場から—」 [平成 21年 6月 16日]

高崎 暢氏 ● 弁護士、札幌弁護士会会長

過労死・過労自殺問題を題材にして、深刻化する労働問題・労働者の人権侵害の現状について理解を深め、この問題をどう克服していけばよいのかを考える公開シンポジウムが行われました。

経済学部労働経済論の川村雅則准教授の進行のもと、過労死問題を中心に弁護士活動に取り組みされてきた高崎暢先生から、労働者の人権侵害の実態が報告されました。過労死問題が日本固有の事例であり、「過労死」が国際用語となっているほど特異な現象であることや、日本の労働者の置かれている労働現場を象徴する4つの事例を中心とした訴訟・裁判事例が話され、また表面化しない人権侵害が多数存在することに、日本人の労働観そのものを変えていくことの重要性が話されました。

聴講の学生からは、「労働者本人のみならず、遺族や家族にかかる負担も大きいのではないか」などの発言があり、将来労働者

となる学生たちも、自分自身の問題として考える貴重な場を得ることができました。



「地域社会とフェアトレード—札幌フェアトレード都市宣言の意義と課題—」 [平成 21年 6月 26日]

長坂 寿久氏 ● 拓殖大学教授、元日本貿易振興機構勤務

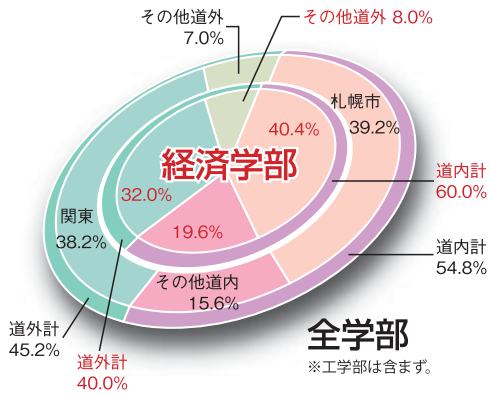


経済のグローバル化、流通の複雑化が進む今日、日常生活には外国製品が溢れていますが、それらが発展途上国の貧困の一因となり、生産現場では人権侵害や児童労働が行われていても、我々消費者にはそれが見えにくくなっているという現実があります。

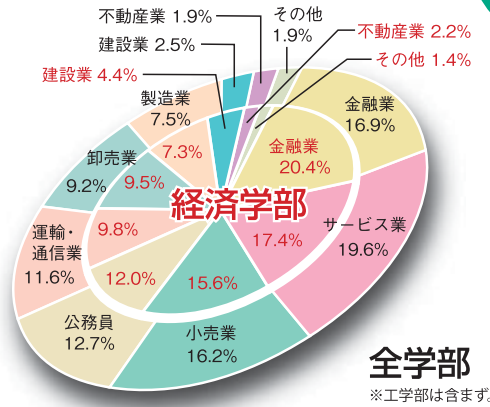
こうした現実を日常の消費行動から解決しようという取り組みがヨーロッパを中心に世界的な広がりを見せています。発展途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することを通じ立場の弱い途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指す運動であるフェアトレード(公正取引/公平貿易)です。

現在、札幌市でも「フェアトレードフェスタ2009」開催や、市民団体が中心となり「日本初のフェアトレード都市宣言」を目指す活動が展開されています。本講演会では、フェアトレードについて長きに渡って取り組んでこられた長坂寿久氏に、フェアトレードの仕組みの解説、札幌で「フェアトレード都市宣言」を実現する意義とそのプロセスについてお話しいただきました。

就職情報 ↓ 本社所在地別就職状況



↓ 業種別就職状況



↓ 就職部の主な支援活動

- ・就職相談・個別面談
- ・ガイダンス（民間・公務員）
- ・面接対策（模擬面接・面接セミナー）
- ・履歴書、エントリーシート添削セミナー
- ・就職講座（民間・公務員）
- ・就職講演会（民間）
- ・学内合同説明会
- ・業界研究会
- ・模擬試験（民間・公務員）
- ・YG性格検査、就職適正検査（R-CAP）の実施
- ・インターンシップの斡旋
- ・資格取得講座
- ・就職ポータルサイトの提供

↓ 公務員・教員登録状況 [平成20年度～平成17年度卒業生・全学部] 平成21年3月31日現在

名称	人数				
	20年度	19年度	18年度	17年度	
国家公務員Ⅰ種	0	4	0	0	
国家公務員Ⅱ種	37	33	25	42	
国税専門官	28	16	24	14	
法務教官 A・B	0	1	0	0	
裁判所事務官Ⅱ種	12	10	4	4	
国会議員政策担当秘書	1	0	0	0	
防衛庁Ⅱ種	0	2	0	0	
自衛隊幹部候補生	4	7	4	9	
自衛隊一般曹候補生	13	4	4	6	
自衛隊曹候補生	-	-	20	13	
北海道職員	上級〈一般行政〉	1	2	0	3
	中級〈教育・警察行政〉	9	16	18	10
	中級〈学校事務〉	2	3	0	0
その他都府県	上級	4	5	0	1

名称	人数				
	20年度	19年度	18年度	17年度	
北海道	警察官	73	89	84	60
	女性警察官	7	2	2	7
警視庁警察官・女性警察官	4	8	14	7	
その他警察官	6	8	14	13	
札幌市	行政	20	14	10	5
	技術系	2	1	1	1
	学校事務	6	1	2	1
	障がい者	0	0	0	1
	消防	11	10	7	8
その他市町村	66	47	23	27	
大学別合格者の公表のない試験※1	14	8	20	18	
公立学校教員	26	33	23	19	
独立行政法人等※2	76	67	33	40	
総計	422	391	332	309	

※1) 本人申告分。受験資格が高卒以上になっているものは大学別合格者数が開示されておらず、申告ベースによる値。入国警備官・刑務官など。

※2) 国立大学等独立行政法人・郵政公社等。

↓ 過去3か年の主な内定先

[経済学部のみ]

企業名	人数
北洋銀行	56
北海道警察	29
生活協同組合コープさっぽろ	18
ニトリ	16
北海道銀行	13
イオン北海道	11
札幌トヨタ自動車	10
セイコーマート	10
ホクレン農業協同組合連合会	8
ラルズ	8



7月4日札幌会場



7月5日旭川会場

6月21日帯広会場

保護者懇談会

本学では、保護者の方に教育内容や学生支援、就職活動の状況を知っていただくため、6月21日帯広、7月4日札幌、7月5日旭川、7月12日函館にて、保護者懇談会を開催いたしました。懇談会では、本学の現状、学生生活、就職活動の状況と支援体制についての説明を行い、希望者には個別面談を行い保護者の方からの相談に対応いたしました。また、参加された保護者の方へのアンケートによると、特に、就職支援体制と就職活動の状況への関心の高さが伺えるとともに、懇談会の内容は概ね満足いただける結果となりました。

市民公開講座のお知らせ

「住民参加による地域づくり」[10月10日、11日]

現在、多くの地域が直面している、深刻な経済疲弊・社会問題の打開のためには、大学にあっては、地域に対する一方通行的な関係ではなく、住民と共に地域が抱える課題を発見し、解決のための具体策を考え、またその過程でそれぞれが鍛えられるという関係の構築が重要となっている。そこで今回の市民公開講座では、地域研究を実践し、地域貢献を果たしている4人の教員に、自らの研究・実践を報告してもらい、それらを通して、地域問題を解決するために、われわれは、何ができるのか・何が求められているのかを考えていきたい。

- 定員 200名
- 受講資格 18歳以上の方であれば、どなたでも参加できます。
- 受講料 3,000円（資料代）
- 申込方法 ホームページ（資料請求フォーム）・電話・FAX・Eメール・ハガキのいずれかの方法でパンフレット（受講申込書兼振込依頼書を含む）をご請求ください。お手元に到着後、パンフレット折込の「受講申込書兼振込依頼書」に必要事項をご記入の上、金融機関にて受講料をお振り込みください。入金確認をもって「申込受理」とさせていただきます。
- 申込期間 平成21年9月1日(火)～10月1日(休)

10/10(土) 講演 1	内田和浩 (経済学部教授)	「住民参加・まちづくりと自治体職員～協働の意味を問う」
講演 2	西村宣彦 (経済学部准教授)	「自治体財政の危機と再生～住民になにができるか?」
パネルディスカッション	コーディネーター: 川村雅則 (経済学部准教授)	
懇親会	※希望者のみ (無料)。お気軽にご参加ください。	
10/11(日) 講演 1	寺田稔 (人文学部教授)	「地域の伝統文化が地域をつくる」
講演 2	鈴木聡士 (工学部准教授)	「数理システムによる地域づくり支援」
パネルディスカッション	コーディネーター: 川村雅則 (経済学部准教授)	

※本講座は道民カレッジ連携講座に指定されています。

お問い合わせ先・パンフレットのご請求先

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号
 北海学園大学 市民公開講座係 (3号館1階 経済学部事務室内)
 TEL.011-841-1161 (内線2222・2257) FAX.011-824-7729
 E-Mail kouza@tyhr.hokkai-s-u.ac.jp